

## 研究経過報告—'76年秋～'78年夏— 小嶋秀夫

1976年8月下旬から1年間、ハーバード大学を足場にして研究する機会が与えられた。その期間を含めた2年間について報告する。

〔認知様式の領域〕 幼児の場依存性の測定については、76年に名古屋市内の幼稚園で得た結果に、以前の未発表の結果も合せたものを、Witkin, Oltman, Kogan, Block たちとの討論を踏まえて論文にまとめた (Perceptual and Motor Skills, 1978, 46)。

従来のアメリカの幼児・低学年児童用の EFT (埋没図形検査) は、図版の形式に問題があるのではないかと、そして、それらよりも、筆者の EFT の方が、目ざした構成概念を測定する点で優れているのではないかと考える。また、筆者が作成した暗室用 PFT (棒一枠組検査) に対する幼児の反応を詳細に分析した結果、低年齢の子どもに適用する際に解決すべき問題点が漸く浮び上って来た。これらの点の解決法が見出されれば、Witkin が不可能と考えていた低年齢児への RFT の適用が可能となり、場依存性という個人差の出現を、より早期からモニターする道が開けることになると思う。

Kagan の MFF (熟知図形組合せ検査) の誤り測度の内的整合性の低さの1つの原因は、衝動型の子どもの選択位置偏好にあると見当をつけた (Perceptual and Motor Skills, 1976, 43)。これを直接支持・否定した論文はまだ見していない。ただし、筆者の精神測定的方法と全く別の眼球運動の記録という方法で、衝動型の子どもの位置偏好は、西独の Wagner たち (1975) によって見出されていた。

日本の幼児・児童はアメリカの子どもよりも認知的に熟慮的傾向にあり、また、より早期に効率よい遂行を示すようになることをキャンザス大学の Salkind と共同で SRCDD の大会 (ニューオーリンズ, 1977年3月) で発表した。それをもとにした論文は、来年頃、Child Development に現われると思う。このような差

を見出すことは比較的簡単であるが、後の研究に結びつくような解釈をすることは難しい。筆者は今のところ、この差異については、幼児期以降の認知的経験の差異よりは、動機づけ面の差異による解釈に傾いている。

幼児に認知様式と知的能力などに関する諸検査を施行した結果は、日本心理学会第41回大会に、院生の宮川・河合・動柄と共同で発表した。

〔親子関係〕 75年の論文を最後にして、実証的な仕事の論文は出せず、レビューアーに墮したままである。日本教育心理学会第20回総会の記念シンポジウムで、自己反省を含めて、過去20年の日本の研究を見直してみる。このシンポジウムの内容は、来年に出版予定と聞いている。

〔児童観〕 日本の江戸時代の子育ての書の中に表われた信念体系を分析したエッセイを Kagan と手がけているが、まだ、1・2回原稿を書き直す必要があり、最終的に現われるのに、あと2年はかかるかも知れない。

この仕事をしているうちに、児童観を扱った従来の研究に、いくつかの問題点があると感じた。それを短いノートに書いた (1977) が、それを発展させたものを日本教育心理学会第20回総会に出し、また何らかの形で論文にしたい。この研究にあたって、資料の読み取りに関して、国文学や教育史 (中国) の専門家が相談にのってくださったのは幸いであった。また、まだ探索中の漢籍が見付らないが、医史学の専門家の手も煩わした。

〔その他〕 以前 (1975) に提案した児童研究の倫理の問題については、アメリカで若干の資料を集め、何人かの人と意見交換をした。ハーバードでは、日本の心理学文献の内容を理解したい人に助力し、また、比較文化研究の本の乳児発達の章に、日本の乳児研究がある程度、紹介されることになった。その他、今、発達心理学の研究法は、どのような体系からなるべきかを考え始めている。(1978年8月)